

氏名	つちやいくこ 土屋育子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第336号
学位授与の日付	平成17年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	元明清における戯曲テキストの継承について

論文調査委員 (主査) 教授 金 文京 教授 川合康三 教授 平田昌司

論文内容の要旨

本論文は、中国元代(1271-1368)に流行した演劇テキストが次の明代(1368-1644)にどのように継承されて行ったのかを、作品に即して具体的に論じたものである。

中国の演劇が本格的に成立したのは、13世紀の金末から元にかけてであり、雑劇とよばれるその戯曲テキストの多くが今日に伝わっている。ただし元代に刊行されたもので現存するものは30の作品にすぎず、残りはすべて明代になって刊行されたもので、明人の改訂が部分的に施されている可能性がある。また中国の伝統演劇はすべて歌劇であり、その脚本は歌詞とせりふから成るが、元の雑劇は北方系統の音楽を用いたため、また北曲ともよばれ、さらに一つの作品が四つの折(幕に相当)から成り(したがって比較的短編である)、主役のみが歌唱するという特徴がある。これに対して明代に主流となった演劇は、南方系統の音楽を用いるため南曲ともよばれ(これはまた比較的大衆的な音楽である弋陽腔を用いたものと、高雅な音楽である崑山腔を用いた崑曲に大別される)、さらに幕数に制限がなく(したがって長篇である)、登場人物すべてが歌うことができる。明代のこのような演劇は、一般に伝奇ともよばれている。

従来における戯曲テキストの比較研究では、元の雑劇と明の伝奇では形式がまったく異なるため、雑劇は雑劇同士で、伝奇は伝奇同士で比較するのが普通であった。これに対して本論文は、元の雑劇テキストの字句が部分的に同じ題材の明の伝奇に継承されていることを明らかにしたもので、これによって従来の常識を覆し、中国演劇史研究に新知見を加えた。

まず序章では、以下の議論の前提として、戯曲テキストの成立とその背景について述べ、テキストの継承という観点から、元明代の戯曲テキストを一つの大きな流れとしてとらえようとする。

第一章「雑劇から南曲への継承」は、二節からなる。

第一節「元刊雑劇の明代以降における継承」では、元代に刊行された雑劇テキストが、明代以降の戯曲テキストへどのように継承されているのかを論じる。元代の雑劇の原型を忠実に伝える現存唯一のテキストは、「元刊古今雑劇三十種」(以下、元刊本と略称)である。本節では、その元刊本の中から「追韓信」・「東窗事犯」・「單刀會」の三つの作品をサンプルとして取り上げ、まず「追韓信」では、元刊本の曲辭が明の伝奇における南曲の歌唱を増補する形で北曲のまま継承され、それが清代のテキストにまで受け継がれている点を例証する。次に「東窗事犯」では、元刊本の曲辭が南曲系テキストの中に、南曲として部分的に継承されている点を指摘する。また、清代中期以降に流行が始まった京劇の脚本集である『戲考大全』に、北曲系の曲辭が収録されている点をも併せて指摘する。すなわち「東窗事犯」の継承においては、明代では互いに影響関係のある北曲系と南曲系の二つの系統が存在したが、清代以降は北曲系が主流となり、現代の京劇にまで受け継がれていることになる。最後に「單刀會」の場合では、元刊本の原本に欠損(中に1ページの下三分の一ほどが破れてなくなっている箇所がある)があり、欠損の度合いが甚だしい曲は明代のテキストである脈望館抄本(于小穀本)に継承されていない点を指摘する。すなわちこの見方によれば、明代の「單刀會」テキストの曲辭は、欠損のある元刊本テキストを直接継承し、その欠損を部分的に補って作られたことになる。また「單刀會」の南曲系テキストは、脈望館抄本を経由して成立したと推測し、

よって「單刀會」の明代におけるすべてのテキストは、みな元刊本がその唯一の源であったと結論する。さらに脈望館抄本は宮廷の内府本に由来する点に鑑みて、元刊本の流傳において、明の宮廷が何らかの役割を果たしていた可能性を指摘する。また「單刀會」の南曲系統のテキストにおいて、崑山腔系テキストは脈望館抄本に近いのに対して、弋陽腔系テキストでは語句の入れ替えが行われているという違いに着目し、崑山腔系と弋陽腔系の性格の違いの一端を論じる。以上、元雜劇の明代への継承には、北曲そのままの形で南曲に取り込まれる場合と、南曲の一部分に衣替えして取り込まれる場合があることを元刊本所収の作品に即して論じ、その一部が現在の京劇に至るまで上演されている点を併せて指摘する。

第二節「明刊雜劇テキストの南曲への継承」は、明代に刊行された元雜劇の南曲への継承について論じる。明刊の元雜劇には明人の改訂が加えられた可能性が高く、元刊本と同列に扱うことはできないからである。例として、「寶娥冤」と「抱粧盒」を取り上げ、それぞれの伝奇への改作である『金鎖記』・『金丸記』および崑山腔、弋陽腔の散齣集（アンソロジー）テキストと比較し、ここにも第一節で考察したのと同じ現象が見られる点を指摘して、第一節の結論を補強する。

第二章「南曲テキストの継承と展開」は、三つの節からなる。まず第一節では、南曲テキストの継承を論じる前提として、テキストの發展の歴史を明らかにする上で一つの鍵となる弋陽腔系散齣集の諸テキストについて、その書誌的事項を概観する。

第二節では、南曲『琵琶記』の弋陽腔系テキストの継承を論じる。明代中期から登場し始める弋陽腔のテキストは、その初期のテキストにおいては、せりふや弋陽腔の特徴である滾調（本来の歌詞の後に七言・五言の詩句を増加するもの）がさほど見られないが、時代がくだるにつれてせりふ・滾調が増加して行く点を指摘し、弋陽腔テキストは初期のもの、變化を遂げた後期のものに大別できると論じる。

第三節『白兔記』テキストの継承では、従来単に三系統（成化本と汲古閣本の汲古閣本系統、富春堂本や弋陽腔系テキストの富春堂本系統、『風月錦囊』などの風月錦囊本系統）、または二系統（汲古閣本系統・曲辭や話の展開に共通点が多い富春堂本系統と風月錦囊本系統）に分けられるとされてきた『白兔記』のテキストをさらに詳しく比較検討し、三つのテキストが相互に影響を受け合い、きわめて複雑錯綜した関係にあることを明らかにし、三乃至は二つの系統に分けられるとはいえず、それらは一つの物語世界を共有しながら、部分的に大きく異なった内容を持つ複数のテキストにまたがって展開していると論じる。

第三章「弘治本西廂記について」は、元代の王実甫作の雜劇で、中国演劇最大の傑作とされる『西廂記』の最古の版本である弘治本（弘治十一年刊）を中心に論じる。まず弘治本は現存する最古の版本であるにもかかわらず、おもにその体裁の不備のため、これまで特に重視されることがなく、弘治本より後に刊行された萬曆刊の余瀟東本と天啓刊の凌濛初本などが、古い形を残しているという見方が主流であった点を挙げ、これについての疑問を呈する。具体的には、弘治本が営利出版であり、明代後期の文人が關與した整理されたテキストなどとは性格を異にする点をふまえ、體裁面からみて、弘治本に不合理な折の分け方、ト書きや脚色名に不統一やそれらの使用数の偏りが見られる点を、従来の見解とは逆に、戲曲テキストの形式的發展という観点からみて、テキストの形式が確立する以前の初期の段階を示すものであると主張する。また最も古い形態を持つと言われてきた余瀟東本には、弘治本には見えない多くの詞が含まれるが、これらの詞は、いずれも明代後期に成立した唐宋詞のアンソロジーである『花草粹編』に収録されるものであり、余瀟東本は『花草粹編』をもとに詞の挿入を行った可能性が高いと主張する。さらに弘治本ではヒロインの崔鶯鶯の父の名を崔珏とするが、余瀟東本にはこの崔珏の名がないにもかかわらず、その音注に「珏」の字を挙げている点を指摘し、余瀟東本が拠ったテキストでは、元来は父の名をやはり崔珏としたであろうと推測、さらに崔珏とは、宋代の民間で信仰された神、崔府君の名であることを指摘して、崔府君の信仰が明代では衰える点から考えて、崔鶯鶯の父を崔珏とする弘治本は、元代の古い形を残していると主張する。以上の諸点から、余瀟東本は必ずしも古いテキストではなく、弘治本の方が初期段階の形態、内容をとどめるテキストであると結論する。

終章では、以上の議論をまとめ、近代以前の中国における戲曲テキストの生成過程では、現代のわれわれが一般的に考える「創作」という概念とは異なり、それ以前のテキストのさまざまな形での引用が行なわれており、この時期の戲曲テキストの真の性格を把握するためには、この点を十分に踏まえる必要があると結ぶ。

最後に、参考資料として「弘治本『西廂記』本文の校注」、「散齣集所収作品の対照表」、「『琵琶記』諸テキスト対照表」、「『白兔記』諸テキスト対照表」を附す。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の貢献は、従来の中国戯曲史研究において、その形式面の相違のため、内容上の踏襲関係が議論されたことはあるが、テキストの細かい比較はほとんど行なわれなかった元代の雑劇テキストと明代の伝奇テキストを詳細に比較分析し、後者の中に前者が多数引用されていることを、具体例をもって証明した点にある。元代の雑劇と明代の伝奇は、中国戯曲史上の二大頂点をなすが、本論文の指摘は両者の関係についての従来の見解に再検討を迫るものである。これに関連して、特に以下の二点が貴重な知見であることを指摘しておきたい。

(1) 第一章第一節「元刊雑劇の明代以降における継承」において、元刊本「單刀會」の欠損部分が、明代の脈望館抄本「單刀會」に継承されず、恣意的に補われた事実を指摘し、脈望館抄本を元刊本に直接由来するものとし、さらに南曲系テキストは、脈望館抄本を経由して成立したとの推測により、「單刀會」をテーマとする明代のすべてのテキストの祖本が元刊本であると主張した点。この点は、元刊本の欠損部分に相当する脈望館抄本の字句をどのように理解するかに複雑な問題が存するため、現時点では全面的に肯定することはできないが、客観的にみて、本論文の主張が妥当である蓋然性は高いと認められる。もしそうであれば、それは元雑劇の元刊本と明代テキストの関係を考察する上で、重大な問題提起であると言える。

(2) 『西廂記』の最古の版本である弘治本は、その刊行年代の古さにもかかわらず、おもに形式面の不備などの理由により、従来さほど重視されず、むしろ後の余瀟東本の方が古い形態を残すテキストであると、田仲一成氏などによって主張されていた。これに対して、本論文は、余瀟東本に引用される詞が、すべて明代後期に成立した唐宋詞のアンソロジーである『花草粹編』に収録されている事実を発見し、余瀟東本は『花草粹編』によって詞の挿入を行なったと指摘、さらに弘治本でヒロインの崔鶯鶯の父の名となっている崔珪が、余瀟東本の本文には存在しないにもかかわらず、その音注に「珪」の字を挙げている点を指摘し、余瀟東本が拠ったテキストでは、元来は父の名がやはり崔珪であった可能性を示唆し、弘治本が余瀟東本よりも古いテキストであることを実証しようとした。『西廂記』は中国演劇を代表する作品であり、明代より今日にいたるまで無数の研究があるが、これまでこの点に気がついた者はいない。これは『西廂記』テキストの研究史上、きわめて重要な指摘である。

このような長所がある一方、本論文には欠点も多くみられる。その中でも重要なものを以下にあげる。

(1) 第一章であつかう元雑劇テキストの明伝奇への継承には、雑劇の北曲の歌が北曲としてそのまま継承される場合と、南曲に衣替えて部分的に継承される場合の二つのケースがあり、両者は区別されるべき性質のものであるが、本論文においては、この点についての認識が明確でなく、両者の性格上の相違が十分に検討されていない。また明代後期の南曲中に北曲が用いられる傾向については、すでに呉梅『中国戯曲概論』、張庚・郭漢城『中国戯曲史』など先人の研究においてしばしば指摘されて来たにもかかわらず、本論文はそれらをまったく参照していない。

(2) 第二章第一節における弋陽腔系散齣集の諸テキストについての書誌的記述では、近年における明代出版関係の研究があまり参照されておらず、そのための誤りがまみ見られる。

(3) 一般的に言って、複数テキストの字句を具体的に比較研究した結果は、その作業を実際に行なった者にして初めて十全に理解できるものであり、その結果だけを実際にはテキストを見ていない読者に伝えるのはきわめて困難である。したがってこのような問題を論文で扱う場合には、構成に工夫をこらし、叙述の仕方にも十分配慮することが望まれる。ところが本論文はこの種の配慮に著しく欠けており、しばしば叙述が錯綜し、テキストを実見していない読者には、著者が何を言わんとしているのか、理解に苦しむ場合が少なくない。この点は、第二章の第二、三節において特に甚だしく、そこではさまざまなテキストの異同がただ羅列されているだけで、著者の主張はその羅列の中に埋没してしまっているような印象さえ受ける。この点は、本論文の一大欠点であると言わざるを得ない。

以上、本論文の長所と短所について、その主な点を挙げたが、全体的に見れば、瑕は瑜を掩わず、短所を補うに十分な長所があり、以上述べた点に考慮して書き改めるならば、学界に裨益する佳作たるを失わないと信じるものである。よって本論文を博士(文学)学位論文として適当であると認める。なお2005年9月5日、調査委員3名が論文内容および関連事項について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。